

自選 五十首

前田康子
Yasuko Maeda



【まえだ・やすこ】一九六六年兵庫県伊丹市生まれ。大学の講義で現代短歌を習い、歌を作り始める。「塔」「京大短歌」に入会。一九九六年に「ねむそうな木」、二〇〇二年に「キノエノコロ」、二〇〇六年に「色水」を刊行する。現在「塔」編集部。夫の吉川宏志との間に一男一女がいる。

見過ごした映画のような風に会う壁にもたれて笑っていたら

『ねむそうな木』（一九九六年）

馬のごと君を撫でやればやさしさはやわらかく首おとすまで

虫除けを茂吉全集に置きしこと人は真顔で何度もほめる

広辞苑ほどの重さに子はなりぬ抱きて歩かな落とさぬように

家族の無数の足跡消すのだらう雑巾持ちて床にかがめば

ねじ花のねじゆるゆると咲きつぎてこの子に淡き記憶力生るる

ひとは誰かの遺族でありぬちらちらと満作咲ける黄の向こう側
『キノエノコロ』（二〇〇二年）

いつも玉子買いたれた感じしてこの細道を登り来る昼

ひつじ草ばつちり開き日陰からあたまでつかちの子らが出て来る

秋の裏側ばかり歩いてた古タイヤ置かれたる野に蓼はそよぎて

ピッコロを誰かがきつと吹いている凶鑑の表紙の白樺の奥

桑の実がつぶれて落ちし通学路ズックの子らがよけて通れり

いつ身籠りているかわからぬ身なりすべりひゆ食べ一夏過ぎぬ

ああ我もヤクルトおぼさんの年齢となり水鳥のそば腰かけている



久々に怪我せし夫は子に見せる耳長山羊に噛まれし指を

何日も橋を渡らず眠りたり指の先まで好りて重し

産みし午後、文字という文字釘のごと飛び出て見える紙のおもてに

さびしい願いが書いてある絵馬は石段降りる我を見ている

犬のように子らは絡みてその横で豆の皮剥く一人必死に

這い回る子と飛び跳ねる子とクリスマスの飾りのまま明ける新年

目薬の一滴で眼がいつぱいになりいたる子よ我を見つめる

乳房がふわりと浮ける感じしてブランコに立つ 妻なり昼も

換気扇の中から電車の音がする不思議な部屋に棲み始めたり

「あなたは」というとき 折りたたまれた君を広げるように言う

【色水】(二〇〇六年)

冬の虹大きくかかり比叡には黒き僧侶がつぶつぶといる

ぴよんぴよんと私が跳べば二人子は真似して跳べりどんな場所でも

ユリカモメあれは真白き磁器ではない悲しみの音伝わるわけない

草の上で踊ってみたいと思うとき遠いところへ腕は伸びたり

今日我は暗がりについて紫の蛭蝶ほどの明るさしかない

オシロイバナ両手に摘んで色水を作って遊ぼう君と日暮れは

戦争が終わりに近くなりし頃事故で破れしジーンズ捨てる

羊歯たちが私の脚をかんでいゝそんな夢見て怪我の日は過ぐ

中学、高校と詩を読み、詩を書いていた。高校の時は学校が嫌だといふような内容の詩だったのに、国語の先生が何人か集まって一緒に詩集を作ってくれた。大学で入った詩の同人誌で批評されていたのは私の詩が「近代詩止まり」ということであつた。現代詩も読んでいたが、萩原朔太郎や三好達治にどっぷりと漬かつていたし、自己否定が詩のテーマでしかなかった。だんだん詩を書く力が沸いてこなくなつた頃、大学で現代短歌の特別講義があつた。そこで初めて、塚本邦雄、俵万智の歌を読んだ。私の行き詰まりを包んでくれる新しい世界がそこにあるような気がした。それからまた別の日、古典文学の老教授が、古典がわかるためには、自分で何か創作をしないとイケないと、言われた。すぐさま短歌をやってみようと素直に思い、学校の階段を駆け上がった。

初期の頃に好きで読んでいたのは浜田到である。それは特別講義の先生からのすすめであつた。前衛短歌というものがまったくわからないまま読んでいたのだが、どこか詩の世界とも繋がったところのある作品と

治されて生きる身体を見てほしい風梳いているあの榆の木に
身の芯にポートの揺れは残りいて漂着すること斜めに歩く

前転ゆ起き上がるときいつも世界が変わった目をする少女は

自意識が目に見えるなら全身が穴だらけだろう向こうが見えて

仏壇を奥へ奥へと拭いていき手首から先違う感じす

足音がどこかに跳ねてもどらない校舎の中を歩む夕暮れ

機織娘に生まれていたら裸足にて買い物に行き文字も知らずに

ものを書く時には髪は邪魔なりし侍のごと結びて字を書く

南までかあんと晴れてこの秋はUFO日和の日が続きたる

なんさいでふつうはこどもうむのかな われの人生子は参考にす

枯れ葦につまずきかけている我を老婆のように子らは支える

シャボン玉吹けばうつむく誰彼も顔あげて見る柔らかき風

封筒の中身のように覗かれて耳はあかあか照らされている

滅菌のガーゼ臉にのせられて春風そこに集まり始む

湯上りの足あと床につづきたり 子は月に向き替えていたる

蝶はつね旅の途中でわれに会う つゆくさはもう閉じたり日中

無音なり おはぐるとんぼそばに来て川の近さを我に教える

秋の尾は長く流れて紫苑色さびしい君の肩をおおうよ

「色水」以降

感じていた。しばらくして、一度だけ、塚本邦雄の歌会へ知人に連れて行ってもらった。大勢が提出した無記名の作品を片っ端から塚本が批評していくという歌会だった。緊張して聞いていると私の歌には「これは浜田到の真似ですか」というようなコメントだった。初句七音の作品で、リズムやモチーフも、いま考えると似ていたのだろう。

たった一首でプロの歌人というもののは、何もかも見抜いてしまうということをその時に知った。短歌という器の不思議さを初めて感じたのである。

結婚して、子供が生まれるまでは月に三、四回歌会に出て、いろんな人と、夜遅くまで、歌について語り合った。たわいもない話のなかに、何を読めばいいか、またどううたえればいいかというヒントがちりばめられていた。